

環境科学概論の構築とその研究・教育プログラムに関する研究

三浦 慎悟¹, 天野 正博¹, 井内 美郎¹, 太田 俊二¹, 柏 雅之¹
鳥越 皓之¹, 谷川 章雄¹, 森川 靖¹, 余語 琢磨¹, 松本 純¹

(¹早稲田大学人間科学学術院)

【研究課題】

環境科学を環境と人間活動の相互作用系ととらえ、持続可能な社会の在り方を提示する学際領域であるとの視点から、この研究では、人間と環境の相互作用系を自然科学と社会科学の両面から評価し、“環境科学概論”にふさわしい大学院研究・教育プログラムとして構築することを目指す。このためには、自然科学系、および社会科学系、各分野における成果とその到達点、解明すべき課題を整理し、相互の関係性や結節点を明らかにし、環境科学としての構成と役割を位置づける必要がある。そこで以下のような研究テーマを設定し、共同的な研究を展開することを目的とした。

(1) 環境科学における空間的スケールによる体系化の研究：環境科学は居住地、地域、都市、地球、産業、農林業、境界などさまざまな空間としてとらえられ、そのスケールにおける固有の問題が存在する。この空間スケールに着目した体系化を試みる。

(2) 環境科学における時間的スケールによる体系化の研究：環境科学は歴史学、考古学、民俗学、環境変遷論、文化発生論など人間活動の多彩な視点からさまざまな時間スケールによって解明されている。その分析視点と時間スケールとを総合して、体系化を試みる。

(3) 環境学における自然科学と社会科学のリンク論：環境科学は、資源科学、環境管理論、システム科学、環境経済学など現状の分析と、課題解決に向けた時代の科学としての役割を負っている。ここでは、空間スケールを横軸、時間スケールを縦軸にし、相互の連携と総合化をはかる。

(4) 環境科学概論の提示と実践的教育プログラムの展開：環境科学の体系化を試み、大学院生をおもな対象に、その教育カリキュラムを提示する。以上を3年計画として取り組んだ。

【2010～2012年度の進捗状況報告】

それぞれの研究会の日付、報告者とテーマは以下のとおりである。

2010年度：準備期間がほとんどなかったことから、研究会は2010年7月より合計4回行った。

第1回（7月28日）：三浦慎悟「日本人の野生動物に対する潜在意識、肉食をめぐる」、参加者10名

第2回（11月24日）：森川靖「住民の利益を考慮した荒廃地

緑化」、参加者15名

第3回（12月22日）：天野正博「気候変動枠組条約、第16回締約国会議報告」、参加者18名

第4回（3月9日）：谷川章雄「江戸の開発と環境」、参加者15名

2011年度：東日本大震災の影響のためにその回数は合計3回留まった。

第5回（11月23日）：田中一生

演題「熱帯林の現状と再生の取組」、参加者10名

第6回（12月6日）：柏 雅之

演題：「EUの直接支払政策が農業構造にもたらす歪み」参加者15名

第7回（2月6日）：余語 琢磨

演題：「西久保湿地における赤米栽培—古代の米収量を探る実験考古学的試み」参加者12名

2012年度：

第8回研究会（7月25日）松本 淳

演題：「大気環境における光化学オキシダントと関連成分の反応に関する研究」、参加者16名

第9回研究会（11月14日）：東出 大志

演題：「“月の輪”でツキノワグマの生態学を開く」参加者25名

第10回研究会（11月28日）：小柳 知代

演題：「里山の生物多様性変化と景観の履歴」

参加者15名

第11回研究会（12月19日）：山田 和芳

演題：「湖沼年縞が解き明かす地球環境史」

参加者18名

3年間で合計11回の研究会を行った。演題は多種多様でいずれもが興味深いものであった。これらの研究会を通して、異なる専門分野の報告であったにもかかわらず、報告者は専門領域と環境科学との関連性について意識的に追及していることがわかった。また、大学院生の出席を2年目から積極的に求めたところ、研究会には常時15名以上の出席があり、出席者の意見を聞いたところ、異分野の学際的な研究会は有意義であり、“環境科学概論”の要望が強いことが判明した。

そこでこの研究プロジェクトの当面の成果として以下の2つの大学院カリキュラムを提示したところ、2013年度が

らの大学院カリキュラムとして採用された。

1) 環境生態学：

環境と人間活動との関係をとらえるための基礎理論として個体群生態学と群集生態学に焦点を絞って、基礎と最近の成果を含めて総合的に解説し、イントロダクションとする。

2) 生態系と人間：

森林、農耕地など各陸上生態系での人間活動の生態系へのインパクトを評価し、その持続可能な利用形態や政策誘導を検討する。

さらに以下の大学院カリキュラムを提起し、準備を行い

たいと考える。

3) 歴史環境学：

人口、土地利用、森林利用、農耕地利用、水界（海・湖・河川）利用とその生態系の歴史の変遷を環境史としてとらえ、人間社会と環境との関係を総合的に評価し、持続可能な社会のあり方を、パネルディスカッション含めて実施する。

いかがであろうか。この3つ以外にも複数のカリキュラムの設計が可能であると思われる。以上、これらの研究会を通じて少なくとも3つのカリキュラムを提示できたことは、重要な成果であると考ええる。